

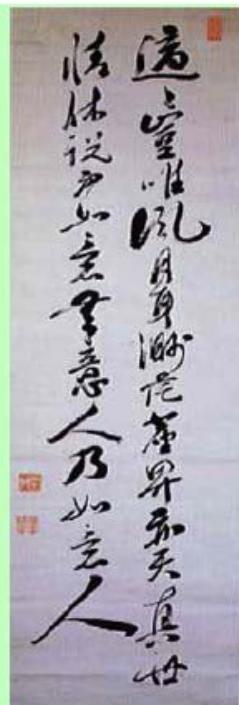
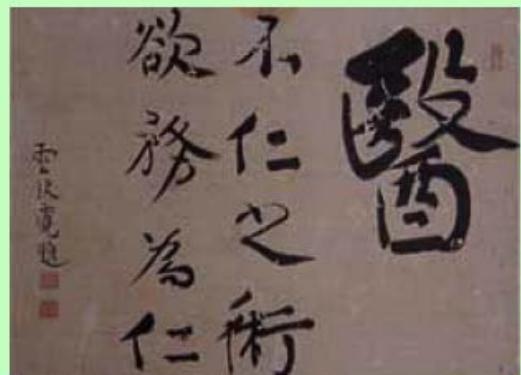
それぞれの近代 一合水堂と適々斎塾・豊前中津の二人－

江戸時代後期、豊前国中津(現大分県中津市)の二人の若者が大坂に出て、それぞれ合水堂と適々斎塾で研鑽に励みました。二人の年は10ほど違い、大坂での修学期間は重なっていなかったと思われますが、同じ中津藩士で、家もそれほど離れていませんでした。やがて二人は、明治を迎え、それに近代を切り拓いてゆきます。大坂の医塾は、単に大坂という地域や医学といった枠組みを超えて活躍する若者を育んでいたのです。

大江家医則書幅 1幅 江戸時代

中津市歴史民俗資料館分館大江医家資料館蔵

「医、不仁之術、欲務為仁(医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す)」。豊前中津藩医、大江家の家訓である。この家訓を胸に大江雲沢(文政5～明治32年(1822～1899))は大坂に出、合水堂で華岡鹿城のち南洋に学んだ。その後、中津に戻り藩医の務めを果たした。維新後は後進の育成に情熱を傾け、中津医学校の開設に努力したり、奨学金30円を寄付して大分県から表彰を受けている。これは、あくまで紀州にあって後進を育て、地域医療に貢献した華岡青洲の精神を通じる姿勢である。



福沢諭吉詩書七絶 1幅 明治時代本館蔵(鈴木新一氏寄贈)

「適々豈唯風月耳、渺茫塵界亦天真、世情休説不如意、無意人乃如意人」。福沢諭吉(天保5～明治34年(1834～1901))が好んで揮毫した詩で、自塾「慶應義塾」の卒業生に授与したもの。適々斎塾で蘭学を学んだ福沢は開明的な姿勢で文明開化を主導し、近代日本の建設に大きな役割を果たした。福沢は洪庵を特に尊敬しており、本詩書出しの「適々」は洪庵の号「適々斎」にちなむものか。